

「世界哲学と芸術の未来」 永井由佳里

概要:「現在人類が抱えるグローバルな問題に対する哲学の寄与」が、世界哲学会議の目的のひとつとして示された。課題を同じくする芸術について「自由」「生命」「人工知能」という三つのキーワードを起点に、これからの10年～100年～千年を考え、哲学と芸術の共鳴を問う。

<その1>

現在、「芸術についての理解や価値観」が急激に変容していることは、誰もが感じ取っているのではないだろうか。2019年の芸術の諸相から、未来を洞察するなら、「情の時代 Taming Y/Our Passion」と題された「あいちトリエンナーレ 2019」を無視することはできないだろう。これは、2010年から3年ごとに開催される国際芸術祭という事業である。報道で取り上げられることが多かったのは物議を醸した「表現の不自由展」を事例に、「自由」というキーワードから、芸術の表現活動と公共性、社会深化がどのように進むのか考えていく。

<その2>

「創造性」ということばは、芸術を考える上で常に意識され、よく用いられる。しかし、「創造性」の概念は曖昧なものである。たとえば、芸術では注目されているのが、その制作行為の創造性なのか、作品の創造性なのか、文脈によって揺らぐ。このように固定されず揺らぐ概念こそ、面白い。今と未来で大きく差が開くとしたら、こうした曖昧な概念にかかるところだと推測でき、飛躍する可能性も高いといえる。また、創造性は人工物と同根の意識であり、意図、すなわち「デザイン」という思考の方向を意味すると考えられる。新たな探索や挑戦を行うことが創造性の証だといえるが、今、「生命」が芸術における一つの目標となっている。「Bio Art」やそれに類する事例から、倫理の問題を含めて議論したい。

<その3>

「独創性」は、創造性よりさらに重要だといえる。潜在的な意味として「価値」という概念があるからだろう。これは、科学や技術においても同様で、オリジナリティが示され、保証されなければならない。どのような専門分野においても人間には独創性が求められる。しかし、独創性が、技術によってもたらされた場合、社会は寛容と拒絶の間でせめぎ合う。今日、社会の諸相で「人工知能」が取りざたされるのは、なにかしら革新的な技術らしいが、一体どこでどんな影響があるのか、またその限界が不確かなせいもあるだろう。芸術の過去においても、機械仕掛けやコンピュータは一石を投じた。容認可能な領域との境界で生じる摩擦が新芸術の価値でもあった。しかし「人工知能」がもたらす人間の拡張や社会の構造変化は、個々人の理解を超える規模だと予想される。独創性という側面では、切羽詰まった状態ではないだろうか。

<補足>

上記に関連し、未来の芸術を考える上で重視すべきことがらとして、SDGsにまつわる芸術の変革(意識・技術)について、また、芸術市場と作品の価格についても、情報提供させていただきたい。

* 発表資料では作品等の表示が困難なため、引用先の情報から検索いただければ幸いです。